



特集

難民帰還に  
揺れるタイ、  
ミャンマー  
国境の今

## 巻末言 道



### こころを寄せる

シャンティ国際ボランティア会  
理事 竹俣 昭孝  
東京都・大林院 住職



ラオス・ルアンパバーンでの托鉢の様子(2017年撮影)

シャンティの活動については、曹洞宗の宗門寺院におりますので、以前から梅花大会等で聞く機会がありました。東南アジアの人々の教育支援、文化支援。そして、国内においても阪神・淡路大震災、東日本大震災の被災地における活動の様子を聞くにつけ、何かできることはないだろうかと、クラフトエイドの商品を購入したり、檀信徒の皆さんに声をかけ募金をしたり、微力ながら協力をさせていただいておりました。しかしながら、実際には私が理解していたことは表面的なことで、まだまだ私のように多くを理解していない方も多いと思います。

シャンティの精神「共に生き、共に学ぶ」の「共に」とは「こころを寄せる」ことです。「こころを寄せる」すなわち私たちは一人では生きていけない。生かされていることを自覚し、感謝のこころ、慈しみのこころを持つこと。お釈迦さま

は「四摂法」という教えをお説きになっています。「布施」こころでもものでも惜しみなく他に与える、「愛語」やさしい言葉をかける、「利行」ためになることをする、「同事」自分と相手と一つになる。

日々の生活に追われ、あくせくと前ばかりをみて進んでいく。余裕がなく自分にとって「必要、不必要」そんなことで何事も区別しているこの時代。私たち一人ひとりが、どれだけ他に目を向けられるか、シャンティ（平和）な生き方を目指し、「四摂法」の教えの実践を心がけたいものです。

マザーテレサの言葉に「私たちはちいさなことからできません。小さなことを大きな愛ですだけです」とあります。一人の支援は小さなことかもしれませんが、国内外において期待されているシャンティの活動を応援する人たちが一人でも多く、大きな力となるよう、それぞれの立場から、どんなところからでも発信していきましょう。



図書館での人形劇の様子  
2018年 ヌボ難民キャンプで撮影  
©Yoshifumi Kawabata

いまから約40年前。ミャンマー政府軍と少数民族軍との紛争により、多くの難民がタイへ逃れ、今なお約930000人が国境沿いの難民キャンプで暮らしています。国際社会からの支援が年々減少する中、帰還へ向けた動きがはじまりました。しかし一方で、帰還先の安全や教育・医療などの支援を継続して受けられるかなど、先の見えない不安を抱えています。2019年7月シャンティは、祖国での再定住へ向け、受け入れ側のミャンマー・カレン州で新たに事業事務所を開設しました。

## Shanti vol.303 CONTENTS

- 4 特集  
難民帰還に揺れるタイ、ミャンマー国境の今
- 16 世界の絵本を読んでみよう  
「私の好きなカレン月」  
ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ 2016年
- 18 世界のおやつ旅  
タイのおやつ／パートンコー
- 19 世界の現場からAIRMAIL  
From 活動の現場 & 現地の子どもリポート  
▶BRC ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ
- 26 Shanti@Tokyo
- 28 シャンティな人たち  
山中 裕子  
生活協同組合パルシステム東京 政策・環境推進部 政策推進課 課長
- 30 ファインダーをのぞいて  
「ミャンマー（ビルマ）難民キャンプでの邂逅」
- 31 お知らせ
- 32 道  
ところを寄せる  
シャンティ国際ボランティア会 理事 竹俣 昭孝  
(東京都・大林院 住職)



今号の表紙  
通学する子どもたち  
2015年 メラ難民キャンプで撮影  
©Yoshifumi Kawabata



特集

# 難民帰還に揺れる タイ、ミャンマー 国境の今

©Yoshifumi Kawabata

ミャンマーの民主化で  
揺れる国境

ミャンマー（当時ビルマ）では、1949年より当時の軍事政権と少数民族の反政府勢力による対立が始まり、1975年以降、戦闘や人権侵害を逃れて人々がタイ側へ流出しました。1984年に正式に難民キャンプが設立されてから30年以上経った今も約93000人が難民として暮らしています。

近年急速に進むミャンマー政府の民主化政策は、難民キャンプの人々にも大きな影響を与えています。2012年、ミャンマー政府は60年以上にわたって反政府武装闘争を続けてきたカレン民族同盟（KNU）と停戦合意しました。和平交渉の中で国内避難民や難民の自主的本国帰還が議論され、2016年10月に両政府合意の下、71人が帰還しました。

帰還へ向けた動きがある一方、帰還をためらう人々も

ミャンマー国内で政府と少数民族との全土停戦協定が結ばれたことを受け、タイ、ミャンマー両政府合意のもと、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が仲介してミャンマーへの難民帰還が動き始めました。しかし、何十年も難民キャンプ内で暮らした人々が本国のミャンマーに帰れたとしても、住む場所や仕事を見つけることは容易ではありません。このような状況からミャンマー・カレン州の南東部地域が難民と国内避難民の帰還先となっていますが、ミャンマーに帰還することをためらっています。

## 難民キャンプで暮らす人々の想い

帰還先の安全、教育や医療など  
継続的な支援を受けられるか不安を抱え、  
多くの人が帰還の決断をできないままです。

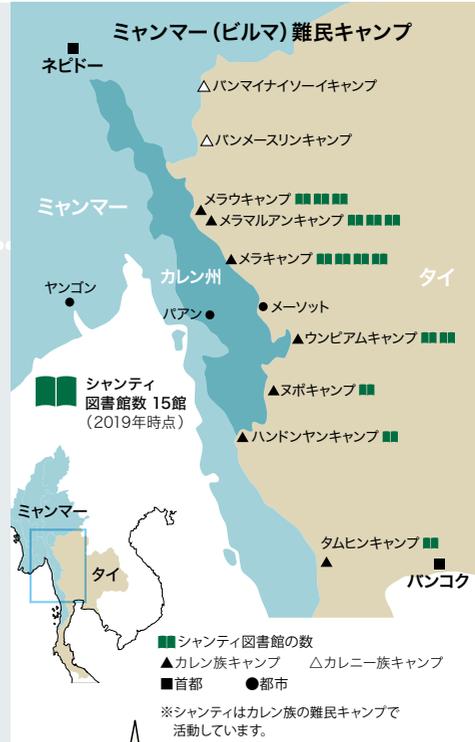
モー・モー・エツさん (28歳：女性)

1997年、突然ビルマ軍が村にきました。私はまだとても小さく、あまり覚えていませんが、とにかく両親の後を一生懸命ついていったのを覚えています。逃げる途中で銃声を聞いたのを覚えています。3日間ジャングルの中を歩き続け、国境を越え、シェルターにたどり着きました。夫とは、難民キャンプで出会い結婚しました。2008年にアメリカへの第三国定住を申請し、最終プロセスは通過しているので、あとは出発する順番を待つだけです。ミャンマーには戻りたくありません。



プレツ・セイさん (66歳：女性)

ミャンマーでは野菜を育てて暮らしていました。ビルマ軍が村に来るたびに怯え、いつも逃げることを考えながら生活していました。ジャングルでどうやって生き延びるのかを考え続けるだけの日々でした。2008年にキャンプに来てから生活は一変しました。戦いや軍から逃げなくても良い、天国のような場所です。ミャンマーにいる子どもたちは時々私たちに会いにキャンプに来ますが、私は一度もミャンマーに戻ったことはありません。ミャンマーに残った子どもたちが今も厳しい生活をしていることを聞き、悲しい気持ちになります。私は将来のことはあまり考えられません。他の国に行きなさいと言われればそれに従わないといけません、ミャンマーの村に帰ることは想像できません。



### 難民キャンプでの活動20年

シャンティは、2000年から図書館を運営してきました。情報が限られている難民キャンプでは図書館が世界と繋がる場所です。また、難民の方たちが世代を問わず情報や心の内を共有する、心の拠り所となっています。現在は青年ボランティアが集い、地域でおはなし会を開催するなど活躍しています。その他、帰還へ向けたミャンマー国内の情報伝える情報センターとしての役割を担っています。



メラウ難民キャンプ内の様子 ©Yoshifumi Kawabata

# ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプの今

## 難民キャンプの教育課題

難民キャンプの人口の約50%は18歳以下の子どもです。閉鎖的な難民キャンプで生まれ育った子どもたちにとって「キャンプの中が世界の全て」です。

キャンプ設立から約40年が経過し、国際社会の関心が薄れ、国際的な支援は年々減少しています。しかし、キャンプ内

の子どもの増加に伴い、校舎、教科書、良質の書籍、教材が不足し、第三国定住政策で教員や指導者層の海外流出が相次いでいます。難民キャンプ内の教育の質の低下は、子どもたちの不登校や中退の誘因となること

も懸念されています。

ミャンマー国内では局地的な戦闘が絶えず、帰還先の安全や継続的な教育・医療支援が受けられるかという不安を抱え、多くの人が帰還の決断をできないままです。人々が行き場のない苦悩を抱え、傷害事件や麻薬の使用、うつ病、自殺者が増加しています。

そのような中、難民キャンプの人々にとって、心が安らぐ場であり、数少ない「世界と繋がる場」となっている図書館ですが、多くの人が利用するため傷みも激しく、床に複数の穴が開いている状況です。

## 故郷に帰還した人々の想い

祖国への帰還を果たした喜びがある一方、  
これからの生活に不安を感じる声も少なくありません。

ウ・クワ・プーさん (58歳:男性)

難民キャンプで暮らしていた頃はキャンプの外へ出ることができませんでした。家や土地など自分の資産を持つことはできず自由に移動することもできませんでした。しかしミャンマーに戻ってきてからは自分の家と土地をもらい、不安もなく自由に好きな場所に行けるようになりました。ただ、村には仕事がないため安定的な収入を得ることができません。成人した子どもたちはバンコクに出稼ぎに行っています。将来お金がたまったら村で自分のお店を持ちたいと思っています。



ナー・マー・ゲさん (41歳:女性)

ミャンマーに帰還し正式なIDカードと戸籍をもらうことができました。子どもたちがミャンマーの公立学校に入学した時、教員の方々が温かく迎え入れてくれたとうれしかったです。難民キャンプ内では日用品の配給があったため収入がなくても生活していくことができました。しかし帰還してからは仕事が見つからず、日用品の配給もないため、今後の生活が少し不安です。自分の家と土地をもらえたので、今後は豚などの家畜を自宅で飼育したいです。



① 帰還民受け入れのため  
新たに建設された住居  
② レイケイコー村で暮らす  
帰還民の家族



カレン州の州都バアンを望む丘から撮影した風景

## 難民が帰還する 「カレン州」とは

ミャンマーの南部に位置するカレン州の南東部地域が、難民および国内避難民の帰還先となっています。ミャンマーでは、多数派であるビルマ族が住む地域と、人口が多い各民族の名前が割り当てられた7つの州があります。7つの州の一つ、カレン州には、その名の通りカレン族の人が多く住んでいます。

カレン州はタイ国境とヤンゴンとの中間地点にあるため、タイからトラックやバスに乗って、多くの物資と人が流れ込んでい



国境沿いの村へ向かう道

## 祖国

## ミャンマーは、 今

### 祖国に帰還した人々の 生活環境

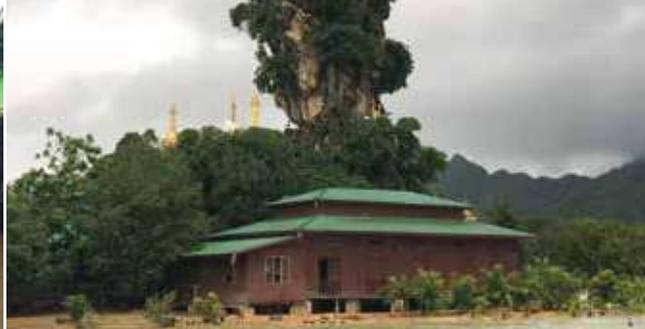
帰還民を受け入れる予定の国境近くの村では、数年前から日本財団や日本の外務省などの協力により、シエルターが建てられています。タイ側の電力会社から電気の供給もされ、水は村の水源から汲むことができま

す。ミャンマー政府により公立学校も建てられ、難民キャンプから帰還した子どもたちの教育環境も整いはじめています。しかし、村には産業がなく、大半の村人が隣村の畑などで日雇いの労働をしたり、タイへ出稼ぎに出るなど、帰還した人々が安定した収入を得ることは難しいのが現状です。

# 観



パアンの中心にあるイエーボー市場



パアンの人気観光地、岩山の頂上に建つ「チャウカラッパゴダ」



紹介する人

中原亜紀

## 新たに事務所を立ち上げた街・パアン / 中原所長がパアンの魅力を紹介

パアンの街の見所  
カレン州の州都パアンには、川、山、洞窟など自然が数多く残され、トレッキングやハイキングが外国人観光客に人気です。他のミャンマーの街と同様に、たくさんのパゴダがありますが、パアンでは多くのパゴダが岩山の山頂にあるのが特徴です。一方、まだまだ発展途上の街で、雨季は大雨による停電が頻発しています。自宅の近くに市場があるため食材の買い出しには困りません。ただ英語がほとんど通じないため、片言のビルマ語やジェスチャーでやり取りをしています。タイ国境とヤンゴンの中間にあるため、タイレストランが多く、中にはタイ語で書かれたメニューやタイ語が通じる店員もいます。不便な点は、街中のタクシーが夜9時を過ぎるといなくなってしまうことです。あらかじめ知り合いの運転手呼んでおけばいいのですが、赴任当時はそういった知識もつてもなく、食事を終えたあとにタクシーを探して街中を歩き回ったこともあります。



左:タラポースープ  
タケノコ、唐辛子、香草などの食材を1時間ほど煮込んで作るスープ。ピリ辛で癖になる味。パアン市内のレストランにたいてい置いてある定番メニュー。



### 料理

事務所の女性スタッフは自宅からおかずを持ち寄って一緒にお昼を食べています。男性スタッフは徒歩やバイクで近くの食堂へ食べに行くことが多いです。



右:この日のメニューは空心菜の炒め物、エビカレー、お茶の葉サラダなど。どれも定番のミャンマー料理です。



### どんな休日を過ごしているか、現地で楽しみなこと

赴任して間もなく、まだ居住スペースが整っていないため、休日はパアン市内のお店を回り、家電や家具などを購入しています。パアン市内のお店は品ぞろえが限られているため、どこで妥協するか悩みます。近くにサルウィン川があり、景色も素晴らしいので川沿いを歩く時間を日常化したいと思っています。

### 移動方法

自家用車を使って移動しています。舗装されていない道が多く、信号が故障していることもあるため細心の注意を払って運転しています。バスや電車などの公共交通機関がないため、タクシーやトゥクトゥクなどを道端で拾うか、電話で呼ぶ必要があります。2000チャット(約140円)ほど払うとたいいてい場所に行くことができます。最近では三輪バイクタクシーが走るようになりました。

上:パアン市内を走る三輪バイクタクシー  
下:三輪バイクタクシーに乗って移動中



### パアンでの必需品



#### 傘、合羽

パアンの雨季はヤンゴンよりも数倍激しく、雨が降らない日はありません。そのため外出時は晴れていても傘を持ち歩いています。

### 住居について

外国人用のアパートなどはありません。地元の人々が暮らしているワンルームタイプの部屋を賃貸で借りました。しかし家賃は地元民の二倍です。そういった決まりがあるわけではないですが、パアンではそれが一般的なことです。コンクリート打ちっばなしの床で家具なども何もついていない部屋だったので契約後に必要なものを買いました。





①コミュニティリソースセンターの運営を担うスタッフ向けの研修会の様子(「おおきなふ」福音館書店) ②運営研修後に撮影した集合写真 ③レイケイコー村のコミュニティリソースセンター開所式の様子 ④ゾーシーマイン村のセンターで絵本を読む子どもたち(「ぞうくんのあめふりさんぽ」福音館書店)



MBP事務所の  
スタッフ

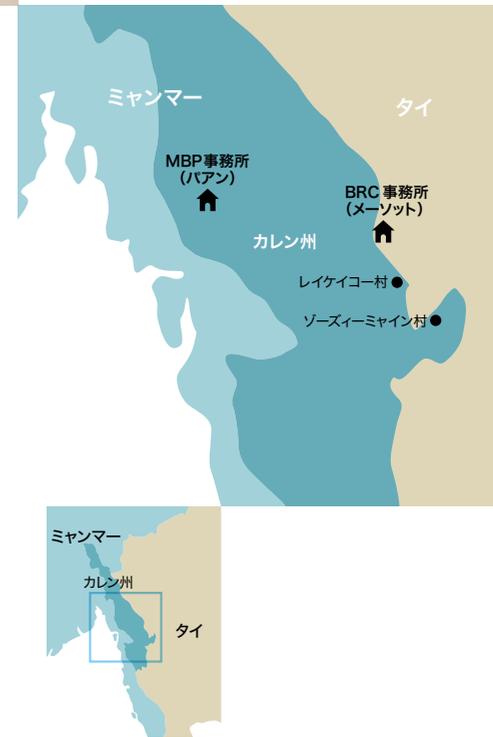
### ミャンマー国境支援事業

🏠 **ミャンマー国境支援事業事務所**  
Myanmar Border Project office  
(通称MBP事務所)

🏠 **ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所**  
Myanmar (Burmese) Refugee Camp Project office  
(通称BRC事務所)



BRC事務所の  
スタッフ



## ミャンマー国境での 新しい一歩

### パアンにミャンマー国境 事業事務所を立ち上げ

難民が帰還する予定のミャンマー南部にあるカレン州の各村では、生活環境を整えようといくつかの組織や団体がミャンマー政府と協力しながら活動を行ってきました。長く難民キャンプで

ンプで支援活動を行ってきたシャンティとしても、難民の帰還に向けた復興・再定住支援を行うため、ミャンマー国境支援事業(通称・MBP)を立ち上げました。シャンティにとって、はじめての少数民族地域での活動になります。

また、難民キャンプからの帰

還民を受け入れる特性上、タイ側にあるミャンマー(ビルマ)難民事業事務所と密に連携を取らなければなりません。そこで、帰還民を受け入れるミャンマー側のカレン州・パアンで新たに、ミャンマー国境支援事業事務所を2019年7月に立ち上げました。

### 人と人が集える場所を

帰還民を受け入れる各村には、図書館はなく、学校には図書室もありません。帰還民と以

前から住んでいる地元住民が集まり、情報交換や交流を行う場もありませんでした。そこで、帰還民と地元住民が集う場所として、コミュニティリソースセンターを建設しました。

センターにパソコンを設置し、図書を配架して情報収集や情報交換ができる環境作りを行なっています。また、センターに來れない子どもたちのために学校に図書コーナーを設置したり、移動図書館活動を行い、広く情報を届ける活動を行う予定です。

### タイとミャンマーで絵本を調達

コミュニティリソースセンターに配架する絵本はタイで購入し、ビルマ語とカレン語の翻訳シールを貼りました。ミャンマーで購入した本と合わせて配架され、センターを利用する人が自由に読むことができます。



配架予定の絵本が事務所に届いた様子

## まとめ

平和に向けた  
大切な一歩ミャンマー国境支援事業事務所長  
中原 亜紀

「雇用の機会が限られている」「キャンプの外に出られず自由がない」「キャンプに長く暮らしているが、故郷と思えない」こうした理由から帰還を決心した女性にレイケイコー村で会いました。2011年にご主人と3人の孫と共にウンピラム難民キャンプで暮らし始めて7年、2018年に村での新たな生活をスタートさせました。3人のお孫さんは中学生・高校生となり、将来はエンジニア、教師や看護師になりたいと話してくれました。「孫にはきちんと高校を卒業して目標に向かう

ていつてほしい、それを支えるのがこれからの自分の役目だと思っています」と話されています。彼らの両親はタイのバンコクで出稼ぎし、定期的に仕送りをしています。

再定住先の村を初めて訪問した時、まだまだ未開発の場所での生活を営む難しさ、大変さを感じました。そして定住を

確実にしていくためには雇用が必要であるとも思い、レイケイコー村で会ったご家族の状況を伺い、改めてそれを痛感しました。

ミャンマーとタイの国境沿いに難民キャンプが開設されてから約40年が経ちましたが、近年、ミャンマー国内で政府と少数民族との全土停戦協定が結ばれたことを受けて、難民の帰還が始まりました。朗報と言えます。しかし、定住先はまだ十分に整っている状況ではなく、自由を得たといっても安心して新生活を営むまでには時間を

要します。希望を持って帰還を決断した人たちにどう寄り添っていくのか、帰還難民支援を行う関係者全体で考えていく必要があります。

2016年に自主的帰還を促進するプログラムがタイとミャンマー政府間で合意され、同年10月に71人の難民が帰還、その後2019年6月時点の帰還総数は約1040人と報告されています。一方でいまだキャンプで暮らす難民は93500人(2019年7月UNHCR)、帰還の支援とともに、キャンプに残っている人々はどう寄り添って支えていくかを考えていかなければなりません。この数字からも今後数年で帰還が終了してキャンプが閉鎖されることは想像しづらいです。長期化する難民支援に對して、国連機関をはじめ多くの援助団体が撤退または支援縮小を余儀なくされ、残された人たちはこれまで以上に大きな

不安を抱え、出口の見えない状況の中で生活を送っています。難民キャンプが持つ特性の中で今後さらに活動を継続していくことの難しさ、厳しさがあるだろうと思いますが、20年近く難民の方々と共に歩んできたシャンティだからこそ、ミャンマーとタイ両国から難民問題の解決に向けた取り組みができるのではないかと思います。

私自身、2001年から約6年間、難民キャンプでの図書館活動に関わり、この間、キャンプに住む人々を通じて、タイ側からミャンマーという国を見えてきました。軍事政権とその状況下における少数民族問題、そして難民問題と、実は表面的な部分しか見えていかなかったかもしれないと、2014年にシャンティがミャンマー本国で事業を開始し、担当として赴任してから少しずつ感じるようになりました。いつになったらミャンマーは民主化して平和な国にな

るのだろう、キャンプに住む人たちが一刻でも早く帰還できる日を願う思いは変わらずにありました。しかしながら、ミャンマー国内における貧困問題、カレン民族を含む全ての少数民族問題への解決無くしては、民政移管後の新政権下の発足にあっても平和に向けたプロセスは決して順調には進まないだろうと思いました。

支援を開始した定住村は帰還以前から住んでいる人たちもいて、既存の住民と帰還民の共存サポートも重要な取り組みの一つとなります。そこに住む全ての人々の共存をどう促進していくのか、「共に生き、共に学ぶ」というシャンティの理念をどう実践に結び付けていくのか、しっかりと考えていきたいと思っています。長い時間を要するとは思いますが、一歩ずつミャンマー全土の平和構築に貢献できるよう頑張っていければと思います。

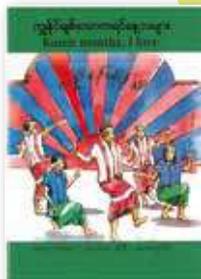
- 1 事業開始時に行ったミーティングでの集合写真
- 2 パアン事務所前で中原所長
- 3 レイケイコー村の住民にインタビューしている様子



世界の絵本を  
読んでみよう

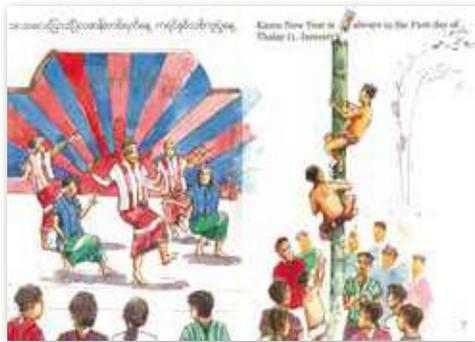
29

ミャンマー(ビルマ)  
難民キャンプ 2016年  
シャントイ出版絵本



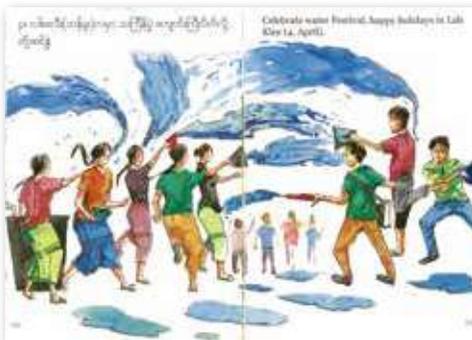
私の好きな  
カレン月

1



カレン民族のお正月はいつもカレン暦での一月の最初の日に行われます。

2



カレン暦での四月では水祭りが行われる休暇期間です。

3



休暇が終わったカレン暦の五月から学校が再開します。生徒たちは喜んで学び、遊びます。

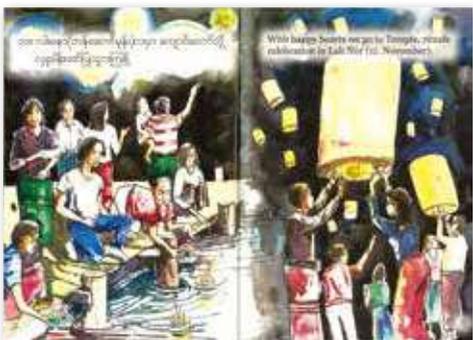
5

カレン暦での十一月には儀式的行事が催され、カレン族の人々は幸せな気持ちで寺に赴きます。



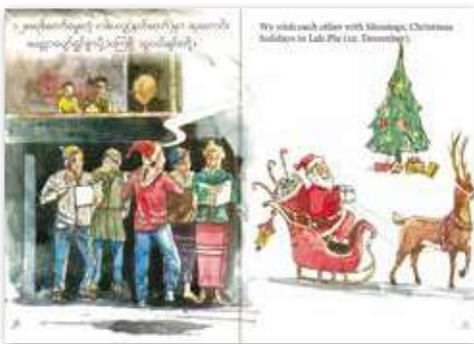
カレン暦での八月には満月の日に手首に紐を巻くお祭りが行われ、みんな集まります。

4



6

カレン暦での十二月にはクリスマスがあります。クリスマスではお互いの祝福を祈ります。



世界の現場から

# AIRMAIL

To 日本の皆さん From 活動の現場

このページでは、  
アジアの各国で活動する  
シャンティの様子や  
スタッフを紹介します。

## From BRC

### ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ

安全や雇用、教育、病院へのアクセスなど、帰還後の生活に不安を感じ、帰還を選択しない人が多いミャンマー(ビルマ)難民キャンプでの活動と、そこに暮らす人々の様子をご紹介します。



### ◀ 子どもの一日をレポート!

難民キャンプで暮らす少女の夢を尋ねて。



### ものづくりの舞台裏をレポート! ▶

難民キャンプで行われている人形劇の舞台裏に潜入!



BRC事務所  
総務担当  
ウェーンさんの  
おすすめおやつ

みんなの笑顔をつくる  
世界のおやつ旅

タイのおやつ  
パートンコー  
พาทองโก๋



BRC事務所の副所長補佐兼総務担当。主に法務や訪問の手配・日程調整などの業務を行っています。

## おやつや朝食・夕食の 定番スイーツ

サワディカー(こんにちは)! 小麦粉に砂糖を混ぜた生地を揚げたシンプルなおやつ「パートンコー」を紹介します。中国語で「油条(ヨウテイヤオ)」ですが、よく一緒に売られていた「白糖粿(パー-tonコー)」という別の食べ物と混同されてこの名前が定着したそうです。食感は揚げパンのようで、味は甘みと塩味と油が合いまったサーターアングイー風。これにチヨコレイトと練乳をかけてスイーツとして食べるか、おかゆに浸して朝食か夕食に食べるのが定番です。細長いもの、四角くて大きいもの、恐竜の形のものなど、さまざまな形を見つけることができます。屋台でアツアツを是非!



路上の屋台、食堂、マクドナルドで気軽に買えます。値段は複数個入って20パーツ(約70円)程度から。

## Hot Topics

### ① 帰還への期待と不安の狭間で生きる人々

停戦合意が結ばれた後、2016年から現在までに4回、合計で1,039人(273世帯)の人が国連機関を通じてミャンマーへ帰還しました。しかし、安全性や雇用、教育、病院へのアクセスなど帰還後の生活に対する不安から帰還を選択しない人は今なお多くいます。

### ② 援助減少の影響と支援の必要性

ミャンマーの民主化や国際的な関心の低下により、難民キャンプへの支援は減少の一途をたどっています。帰還志願者が多いとは言えない状況下では、帰還地の支援と同時にキャンプ内の人々の支援も必要です。



### ③ ミャンマー国境支援事業が始動

帰還が始まったことを受け、シャンティはミャンマー国境支援事業事務所をミャンマーのカレン州に設置し、ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所

と共に、帰還地域の住人と帰還した難民の人々との共存と発展を目指し活動を開始しました。皆様の声に耳を傾け、ミャンマーの平和に貢献できるように努力していきます。



## From BRC

### ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ

今だ多くの人が暮らす難民キャンプでは、帰還後の生活を不安に感じる声が少なくありません。帰還後も安心できるような彼らの心の支えとなるよう活動に取り組んでいます。



ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所  
副所長  
ジラポーン・ラウィルン(セイラー)

#### PROFILE

難民キャンプ内の学校で教育・文化の人道支援従事者として勤務。2001年より現職。人生のモットーは“Every cloud has a silver lining(やまない雨はない)”

ボランティアの存在が大きな支えであり誇り  
困難を乗り越え事業の成果が表れたとき、言葉にならない喜びを感じます。予算不足で支援ができなくなってもなお積極的に活動してくれる図書館青年ボランティアの存在は、私の大きな支えです。感謝の思いや子どもの笑顔を受け、事業を共に進められたことを誇りに思います。

多様性の中で、皆が平等に教育の機会を得るために  
近年、タイとミャンマーの国境は急速に発展し、異なる文化的背景を持った人々が国境を行き来するようになりました。それに伴い、言葉や民族、宗教、これまで受けた教育の違う人々の間に、教育の格差が生まれています。多様性の中で、すべての人が平等に教育の機会を得られることが求められています。  
私は難民キャンプ内の学校の教師でした。教科書や参考書などの教育関係の資料が不足する中で、教える側も教わる側も苦労していました。教育を重要視する親は少なく、読書推進に理解を示す人も多くはありませんでした。しかし、図書館に子どもが通い、読書推進活動が続ける中で、効果が認知されるようになりました。現在では、先生や地域のリーダーと協力し、図書館活動を推進しています。



私の1日を紹介します!

21:00 就寝



20:00 自由時間

宿題をしたり、図書館から借りた本を読んだりします。ビルマ語の雑誌は特に気に入ります。



17:30 夕食

ご飯を炊くのが私の仕事です。ご飯と一緒に食べる魚のカレーやスープは絶品です。



15:30 放課後

友達と図書館に毎日通っています。家に帰ったら、シャワーを浴びて夕食の準備を手伝います。



12:00 家でお昼ごはん

フィッシュペーストと野菜を、朝の残りのご飯があるときはそれと一緒に食べます。



8:30 授業を受ける

カレン語、算数などいろいろな教科がありますが、一番好きなビルマ語の授業がある日は学校へ行くのが楽しみです。

7:00 起床

顔を洗い、髪を整えて学校に行く準備をします。



1日がスタート!

7:30 朝食

朝ご飯を準備する時間がないときは、近くのお店でモヒンガー(ミャンマーの麺料理)を食べます。



8:10 通学

通学路には、急な坂や狭い橋があります。



私が住んでいるのはこんなキャンプ



キャンプ教育部会事務所(OCEE)主催のサッカー大会では、年に1回メラ難民キャンプ内のすべての学校のサッカーチームが参加して実力を競います。自分の子どもや友人、近所の学校、気になるあの子を応援しに、老いも若きもみんな集まり大盛況。楽しい日差しの下でも女性たちの声援は鳴りやみません。



カレン語・ビルマ語  
両方を話せるお医者さんになりたい

私は、父と図書館員の母、姉の一家と5人の兄弟とメラ難民キャンプで暮らしています。キャンプ内の多くの人はカレン語を話します。私の家族のように、ビルマ語もカレン語も話せる人は多いとは言えず、ビルマ語しか話せない人は困ることもあります。そのため、カレン語とビルマ語の両方を話して地域の人々を助けているお医者さんは、とても輝いて見えます。今からたくさん勉強して、将来はコミュニティーのすべての人の役に立てるお医者さんになりたいです。

From BRC / ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ

## 現地の子どもリポート

難民キャンプで家族と共に暮らす11歳のスイートさんに、現地での暮らしやお気に入りの遊びをレポートしてもらいました!

### メラ難民キャンプから スイート・ポウ・ポップさん(11歳) がリポート!



#### 私のお気に入り

##### 「小石で遊ぶゲーム」

石を片手で持ち空中に投げてキャッチするゲームがお気に入り。片手で複数の石を空中に投げ、その手で床に置いてある石を拾って、空中の石も落とさずにキャッチしたり、手の甲にすべての石を乗せ、裏返すと同時にキャッチするなどの技があります。失敗すると相手の番。よく友達や兄弟と一緒に遊びます。



## 1 どんな作品を作るのか 打ち合わせ

まずは、人形劇で使うおはなしを決めます。すでにある絵本から選ぶこともあれば、独自におはなしを作ることもあります。おはなしを作るときは、環境問題、健康、平和などをテーマにします。いずれの場合も10分から15分の長さになるように調整します。



舞台の  
ウラ側



## 2 劇中で使用する 人形・小道具や 台本の制作



おはなしが決まったら、登場人物の人形と台本を作ります。一から手作りする場合もあればお店から人形を買うこともあります。台本は、「面白くて分かりやすい」ことを心がけてつくります。各キャンプの特徴に合わせて、キャンプごとにセリフを変えることも。

## 3 完成した台本で 稽古スタート

事務所で練習をした職員が各難民キャンプの図書館青年ボランティアの前でお手本を見せた後、図書館青年ボランティアが練習を開始します。オオカミなら怖くて大きく、老人なら弱々しく、キャラクターを印象づける声の練習は最も苦勞します。



From BRC / ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ

## ものづくりの舞台ウラ

図書館活動を難民キャンプ全体に広げるために行われてきた人形劇。その舞台裏をのぞいてみたら、スタッフの熱い想いが見えてきました!



オモテ  
舞台

演者と観客が一体となって  
楽しめる人形劇

難民キャンプ内で図書館活動を周知するため、人形劇やおはなし会などのイベントを開催しています。オオカミがこわそうな大きな声で子どもたちと目線を合わせるように登場したときは怖がつてくれたり、懲らしめられているときは笑ってくれたり、投げかけた質問に大きな声で答えてくれたり、台本で意図したとおり、またはそれ以上の反応が観客から返ってくる、演じている側にもさらに熱が入ります。「人形を通じて演者と観客が一体となって楽しむ様子は、人形劇の持つ力を感じさせてくれる」と職員は言います。

### 制作秘話 重要な悪役のオオカミ

このオオカミは、『さんびきのこぶた』や『あかずきんちゃん』など複数のおはなしで登場し、悪役としてとても重要な役割を果たします。そのため、存在感を発揮できるように工夫する必要があり、悪役の特徴の一つである「恐ろしさ」を強調しました。ペンで形を書きだし、そ

れに合わせて布を切ります。すべての素材がそろったところで、糸で縫い付けます。しかし、ただ素材を縫い付けるだけでは、優しく見えてしまう。一目で怖いオオカミだと思ってもらえるよう、口や歯の角度や大きさ、目の鋭さなど、試行錯誤を繰り返して、ようやく完成しました。

オオカミ





③ 自分を成長させないと

事業サポート課に着任し、特に課長の立場になってからぶつかる壁がたくさんありますが、周りの課員や経験の長い海外事務所の所長に日々助けられています。周りへの感謝の気持ちを忘れずに、自分なりのチームの支え方を見つけ、「自分の成長なくしてチームや組織の成長なし」という気持ちで、さまざまな学び、経験を通して自分を成長させていきたいです。

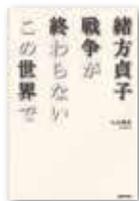
② 仕事も子育ても楽しみながら

主人をミャンマーに残し、3歳になる息子と2人で生活しています。日本では実質シングルマザーで、言うことを聞かない年ごろの子どもに手を焼いています。子どもの成長は私にとっては何よりの喜びです。仕事と子育ての両立は、悩ましいテーマではありますが、息子に対しては、母がいきいきと活動する姿を見せていきたいと思っています。

① 海外事業や国について深く知る

課長になって最初に取り組みたいことは、各海外事務所に出張し、事業視察を行い、日本人駐在員や現地職員、カウンターパートや裨益者と直接話して、その国について、事業について、関わる人の思いについて深く知ることです。これまで間接的に聞いてきたことを、自分の五感をフルに使うことで理解し、事業について海外事務所と一緒に考えられるようになりたいと思っています。

茨城から電車で通勤する私の移動の友は「本」です。最近読んだ私たちの仕事にも関わる本を紹介いたします。



『私たちが国際協力する理由 人道と国益の向こう側』  
著・紀谷昌彦、山形辰史  
(日本評論社)  
日々の業務から視点を上げ、日本のNGOの役割やその強みをどう生かしていくかを改めて考えさせられた一冊。

『緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で』  
著・小山靖史 (NHK出版)  
「5フィートの巨人」と呼ばれた故・緒方貞子さんの評伝ノンフィクション。彼女の言葉とその考えに背中を押されます。



菊池さんのお気に入りアイテム  
[通勤中に読む本]

PROFILE  
菊池 礼乃さん

一般企業で勤務したのち、留学や国際機関でのインターンを経て2011年入職。約7年間ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所に勤務後、2018年より事業サポート課海外事業担当に。2019年7月より現職。

人々がいきいきと生きられる社会を築くための力へ

事業サポート課の役割は、海外事務所の事業・事務所運営が円滑に行われるようにサポートすることです。日々の業務サポートに始まり、ネット

2018年までミャンマー(ビルマ)難民事業事務所に勤務し、7年半難民支援事業に携わる中で、「人間の尊厳」という言葉の持つ重みを知りました。同時に、「コミュニティ図書館が、住民の心のよりどころであり、限られた環境の中で子どもたちの好奇心を花開かせられる場所となっている姿を間近で見してきました。こうした学びを自分の核とし、事業サポート課の課長という立場で、各事業がそれぞれの国や地域での社会課題、開発課題の解決・改善に向けて取り組むための後押しをします。

たいと考えています。現在、国際協力に関わるアクターが多様化する中で、改めてNGOの存在意義が問われています。貧困層や少数民族の人々の内発的發展に寄与するような寄り添った活動は、NGOだからこそできることです。今後もNGOの強みを生かした活動を実践できるように、海外事務所を支えたいと思います。そして、私自身のモットーでもある、どんな環境においても、「その人がいきいきと生きていける」社会を築くための力になりたいです。

ワークへの参画と提言、公的機関などからの資金調達や教育事業にかかるリソースの集約と共有、さらに人材育成など業務内容は多岐にわたります。

パルシステム食品の宅配事業の様子



パルシステム東京は、食品などの宅配事業、高齢者福祉や保育園などの福祉事業、生産地とともに取り組む再生可能エネルギーの電力事業、「助け合い」の輪をつなげる共済事業という4つの事業を展開しています。また、作手と交流する産地ツアーや小学校でのお米の出前授業などの「食育活動」、石けん利用の推進などの「環境活動」、国際協力や戦争体験の継承などの「平和活動」にも力をいれています。

1996年からは紛争や難病、貧困など世界の厳しい状況にある子どもたちの支援を目的に、パルシステムの利用者(組合員)が食品の注文と一緒に募金をする「平和カンパ」に取り組んでいます。その平和カンパを2012〜19年にかけて、シャンティさんが支援するタイ国境のミャンマー(ビルマ)難民キャンプの図書館事業に活用いただきました。他にも、難民問題を考えるワークショップや、イベントでのクラフトエイドの販売などで連携してきました。パルシステムは、物語のある商品や体験を届けることを大切にしてきました。例えば、人気商品の「パランゴンバナナ」。砂糖の国際価格暴落の影響を受けたフィリピン・ネグロス島で、職を失った人々の自立を支援するため、フェアトレードのバナナの取り扱いをスタート。こ



①「ストップ!児童労働キャンペーン」の「レッドカードアクション」に参加(左端が山中さん)  
②「絵本を届ける運動」親子ボランティア体験の様子

のバナナを「選ぶ」ことで、人々の暮らしを支え、農業を使わない栽培は、人々の健康や地域の環境を守ることもつながっています。価格や品質だけでなく、商品ができるまでの背景や、社会・環境に与える影響を考えた商品を選ば「選ぶ」ことで社会を変えていくことを目指しています。シャンティさんと取り組む国際協力や平和活動も、この考え方が根底にあります。安全安心な食や暮らしは、平和な社会が背景にあるからこそ。平和を当たり前と思わず、努力して守っていくために「ふだんのくらし」の中でできる平和・国際協力活動を続けていきます。組合員の多くは子育て経験のあるお母さんです。絵本や図書活動を通して、子どもたちに学びの楽しさを伝えるシャンティさんの活動は、多くの共感が寄せられています。最近、組合員から「ボラ

ンティアをしてみたい」という声が多くなりました。そこで今年「絵本を届ける運動」の親子ボランティア体験を開催しました(写真②)。参加した親子から「これなら私にもできる!と思ったことが大きな収穫でした。娘の『家でもできるね』という言葉がその証拠です」という声も。体験を通じて、世界の問題に目を向け、「お互いさま」や「助け合い」の気持ちを育む機会をたくさん作っていくことが、パルシステムにできる「国際協力」の形。生活者目線の国際協力活動を、今後も絶やさず広げていきたいです。シャンティさんとは、寄付する、される、という関係ではなく、同じ志を持ったパートナーだと思っています。これからも地域の自立を大切に、人々に寄り添うシャンティさんらしい支援活動に取り組んでいきたいです。

## 山中裕子

生活協同組合パルシステム東京  
政策・環境推進部 政策推進課 課長

パルシステム東京は、安全で安心な食品をお届けする生協(CO・OP)です。1都9県の10生協で構成しているパルシステムグループの一員で、「私たちの『選ぶ』で未来は変わる」をスローガンに、作り手のくらしや環境にも想いを馳せ、持続可能な社会を目指す取り組みを続けています。2017年には「第1回ジャパンSDGsアワード」で「SDGs推進副本部長(内閣官房長官)賞」を受賞。そんなパルシステム東京との関係は、1997年、パングラデシユのサイクロン被災者支援カンパがきっかけでした。

## シャンティからのお知らせ

### 台風19号 長野市内の避難所で「子どもの居場所」支援を実施

10月に日本列島で甚大な被害をもたらした台風19号により氾濫した長野県・千曲川周辺に職員を派遣し、物資配布などの緊急支援活動を実施しました。長野市内の避難所は長期化しており、日頃より協力関係にある宗門組織や県内外の協力団体と連携し、避難所における子どもの遊び場、学習スペースの運営の支援を行っています。



#### ■「台風19号 緊急募金」受付中

郵便振替：00170-8-397994

加入者名：SVA緊急救援募金

\*払込取扱票の通信欄に「台風19号 緊急募金」と明記して下さい

## 人事のお知らせ

### ●入職

荒川 千尋 地球市民事業課 国内緊急救援担当(10/23付)

中村 美和 経理課 国内/海外経理担当(11/1付)

佐々木 ひろみ 広報・リレーションズ課 マーケティングチーム  
支援者サービス担当(12/1付)

岡 敦子 広報・リレーションズ課  
「絵本を届ける運動」補佐(12/4付)

清藤 明子 広報・リレーションズ課  
支援者サービス補佐(12/9付)

## お詫びと訂正

前号「シャンティ2019秋号(通巻302号)」の記載に一部誤りがございました。謹んでお詫び申し上げます。

### P8 出版社名

誤) にじ(福音館) たべものたび(福音館) うずらちゃんのたからもの(福音館)

正) にじ(福音館書店) たべものたび(童心社) うずらちゃんのたからもの(福音館書店)

### P9 出版社名

誤) とりになったきょうりゅうのはなし(福音館) しっぽのはたらき(福音館)

正) とりになったきょうりゅうのはなし(福音館書店) しっぽのはたらき(福音館書店)

### P14 ふりがな

誤) 川辺陽子さん(かわべ ようこ)さん

正) 川辺陽子さん(かわべ あきこ)さん

### ●退職

野口 早苗 広報・リレーションズ課  
「絵本を届ける運動」担当(12/31付)

### ●雇用形態変更

埴 香織 広報・リレーションズ課  
「絵本を届ける運動」担当(10/1付)  
※パートタイムからフルタイムに

シャンティ 2020年冬号(通巻303号) | 2020年1月1日発行

発行人：若林恭英

発行所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会  
〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階  
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220  
WEB：www.sva.or.jp E-Mail：info@sva.or.jp

編集人：山本英里、鈴木晶子

編集・制作：株式会社文化工房

印刷：株式会社サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。  
©Shanti Volunteer Association.  
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



川畑 嘉文(フォトジャーナリスト)

Yoshifumi KAWABATA

ニューヨークの雑誌社勤務時代に9.11を経験し、記者職を捨てて写真の道に進むことを決意。2002年、会社を退職しタリバン政権崩壊後のアフガニスタンを訪れ取材を行った。2005年フリーランスのフォトジャーナリストとなり、世界中の難民キャンプや貧困地域、自然災害の被災地で取材を行い、雑誌や新聞などに写真と原稿を寄稿している。



家族と暮らすモーゼさん。

## ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプでの邂逅

「ここでの生活に興味などないよ。モーゼさん(当時87歳)は遠くを見つめながら呟きました。彼と出会ったのは2008年のこと。1984年にミャンマー軍による強制労働から逃れてきた彼は、メラキャンプで暮らしていました。

第二次世界大戦中はイギリス軍に協力していたモーゼさん。日本兵捕虜の監視が任務で、捕虜から日本語を教わりました。インタビュアーをしていると突然当時の流行歌「愛国の花」を日本語で口ずさみ、驚かされたのを覚えています。

「母国を侵略した日本を恨んではいないのでか？」と尋ねると「日本のしてきた過去はもう忘れたよ」と笑顔を向けてくれましたが、話が現状に移るとキャンプから出たいと苦しい胸の内を明かしてくれたのでした。



上：2008年1月13日、図書館で子どもの日のイベントが開催された。下：2008年のメラキャンプ。風景は今もほとんど変わらない。

